

臨床社会学の方法(53)

希望としての脱暴力論

中村 正

1. 男性の当事者にいかに届けるか

『脱暴力の臨床社会学』（人文書院、2025 年）についていろいろな感想をいただいた。その一つを紹介しておきたい。竹端寛さん（兵庫県立大学環境人間学部准教授）が「暴力を許容する日常的思考の意識化」と題し、ブログで書いてくれた。その一部抜粋である（2026 年 4 月 21 日付）。

中村正さんの『脱暴力の臨床社会学』（人文書院）を読み終える。彼の 30 年以上の臨床経験が詰まった、濃厚で迫力ある著作である。ただ、読んでいて、僕自身も結構キツかった。なぜこの読書体験がキツかったのか。それを、中村さんは著作内で示してくれている。

「暴力問題を焦点にすることで男性性ジェンダーがみえてくるし、加害者臨床でも彼らの思考と認知の枠に学ぶことは多い。共犯性を持つ男性文化のなかを生きる男性としての筆者の立ち位置や不安定さも見えてくる。加害者とされる男性とかかわりながら、同じ男性文化の暴力の文化のなかを生きてきた自らの影が彼らの加害行為や暴力行動をとおして見えてくる。その影の中にある「暴力を振るう男性であり得たかも知れない自己」と現在の自己との差分の自覚は「離脱（デジスタンス）研究」ともなるし、男性性を一枚岩で描かない柔軟な男性性ジェンダー論となる。暴力を振るわない男性は暴力の文化

のなかをどのように生きてきたのか。共生、和解、修復、持続、平和という異なる価値を表現する男性と男性性の視点はいかにして構築可能なかと問うことの一環にこの立ち位置の自覚がある。」(p290)

この本の、特に 2 章「どうして殴るのか——正当化としての「言い訳」が手がかり」を読んでいる際に、「暴力を振るう男性であり得たかも知れない自己」を突きつけられていた。それが、しんどかった。確かに、僕は妻や娘に暴力は振るっていない。小さい頃から、喧嘩や暴力も苦手だった。でも、弟には 10 代まで、叩いたり、言葉での威嚇行為をしていたことを、ヒリヒリとしながら思い出していた。今はふるっていないけど、かつて僕も暴力を振っていたのだ。自分の中に、「殴る」男の身勝手性が、全くないと言えば嘘になる。その己の「影」と向き合うのはしんどかったし、なぜ自分がいまそこから距離を取り、「離脱（デジスタンス）」出来ているのか、を考えるのも、重要な視点であると感じる。

「暴力は「自然」にでてくるのではない。男性のもつ本来性でもない。ではどうして彼は暴力に至るのか。冷静に考えればこれをささえる思考と認知の図式は矛盾している。同じようなことを他人すると暴力として裁かれる。親密な関係性にあってはそれが許されると考えている。つまり他人でない人として家族のメンバーをみていることになる。自他の境界は親密な関係性のなかでは変容している。暴力があつて当然のように、家族だから、夫婦だから、親子だからという自動思考が作用する。恋人もここに入る。総じて、共生体感情に根ざした暴力肯定の思考

といえる。」(p109)

僕が他者には一切手を出さなかったのに、弟に暴力を振るっていた。これは「兄弟だからという自動思考」が作用していたのだと思う。まさに中村さんの言うように、「共生体感情に根ざした暴力肯定の思考」であり、それは男性の持つ本来性ではない。そして、その共生体感情は一方的なものである。実際に、成人になった後、弟とは疎遠な関係性になった。そして、その背景に、兄による弟への暴力的関与と、それに対する弟の拒絶があった、と思うと、己の身勝手さに身がよじれる思いである。

「筆者は、対人暴力は個々人の行為であるが、男性性との関係は深く、ジェンダー問題が背景にあり、総称すれば「男性性をめぐる社会病理」として暴力を位置づけることができると考えてきた。また、暴力を振るう諸個人のパーソナリティ特性もあり、社会問題というだけでは漠然としすぎていて行動化する当該の個人を対象にする臨床とはいえない。とはいえ、暴力を振るう個人の特性だけに還元してしまうと、正義の暴力等「動悸の語彙論」が指摘するような社会的行為という面が後退する。したがって、社会モデルでも個人モデルでもない理論を展開すべきだと筆者は考えている。」(p239)

<https://surume.org/2026/04/8200.html>

こうした対話調の記述、かなりの分量の読後感として書いてくれている。男性性ジェンダーを手掛かりに自分と対話するようにして読んでくれている様子が嬉しかった。もちろん研究者として読んでいただいたのだが、しかし、冒頭の一言、男性当事者性が無視できないので、読み進めるのはきついと語る。暴力を振るう人にも届けたいと思って書いたのだが、値段が高いこととは別に、内容からして暴力や自己理解のためにという趣旨の手前のところで壁があるらしい。どうして暴力を振るうのか、それを男性性ジェンダーの視点から書いているのだから、

何らかの当事者性を持つことになる男性は、DV や虐待の加害当事者でなくても読みたくないだろう。逆に言えばそれほど男性にとって暴力問題は大きいということだろうか。社会の主流となっている男らしさの文化は育ちの過程で暴力性を呼び寄せる。

2. 暴力は連鎖するという調査研究

男らしさや男性性ジェンダーを暴力の背景として考えるアプローチは、暴力をその個人の問題だけにしたくないからである。私は、暴力の文化があり、男性性形成と密接に関連していると考えてきた。そして家族、学校、企業、クラブ、仲間集団などもまた育ちの環境として影響を与えるのでそこに宿る暴力の芽を指摘してきた。そしてそれらは学習される。学習されたものは自らの人生のなかで実現されていく。繰り返す。これは暴力の連鎖や再生産として研究されてきた。暴力を個人の問題にしないことはこの論理で支えられていく。最近の研究を紹介しておこう。

1)「暴力の世代連鎖は高齢者虐待にまで及ぶか？ 一幼少期の逆境体験は、高齢者虐待のリスクを高めることが明らかに一」として東京大学のプロジェクト研究報告がなされている。

幼少期(18歳未満)に逆境体験がある人は、65歳以上の高齢者に対して暴力や暴言などを振るうリスクが高いことを検証している。その機序には、心理的要因が最も寄与しているという。これまで、幼少期に逆境体験(子どもの頃に体験した事柄:虐待、ネグレクトや家庭内暴力、親との離別など)が

ある者は自分の子どもに暴力を振るう児童虐待のリスクが高くなることに対して「暴力の世代間連鎖」という言葉が使われてきた。「子どもではなく高齢者に対しても暴力を振るうリスクが高くなるのかを検証した点に新規性がある」という報告である。

暴力の連鎖はあらゆる弱者に及ぶ可能性が示され、高齢者虐待の社会・環境要因のリスク因子の一つを明らかにしている。「暴力を予防する重要性」への指摘となる。

これまで「暴力の世代間連鎖」という言葉は、幼少期に逆境体験を受けた者の子どもへの虐待のリスクが高くなるという文脈で広く使われてきた。報告書は指摘する。「幼少期の逆境体験の影響については、ライフコース疫学と呼ばれる分野で注目を集め、多くの健康との関連が明らかとされてきましたが、まだ検証されていないことも多くあります。例えば、幼少期の逆境体験と高齢者虐待の加害リスクとの関連は、十分に検討されておらず、そのメカニズムも明らかにされていませんでした。そこで本研究チームは、幼少期の逆境体験のある者において、65歳以上の高齢者に対して暴力や暴言を行うリスクの関連を検証しました」と。ライフコース疫学という分野があることは知らなかった。

調査研究の結論は次のようである。「2022年に実施した調査に回答が得られた32,000人のうち、年齢・性が欠損、高齢者に日常的に接する機会のない者を除外し、逆境体験の項目、虐待の項目へ回答した20歳から64歳の男女13,318名を対象に分析を行いました。結果、回答者のうち1,133人(8.5%)の参加者が高齢者に対する加害経験があると答えました。また、幼少期の逆境体験の

ない参加者と比較して、逆境体験が1つある参加者の加害リスクは3.22倍、2つ以上ある参加者の加害リスクは7.65倍になることが明らかとなりました。さらに、媒介要因を分析した結果、大きな間接的効果を示した因子には、うつ病、うつ病以外の精神疾患、および主観的健康感と、特に心理的因子が寄与していることが明らかとなりました。本研究で、虐待の世代間連鎖は、高齢者虐待の加害リスクと関連していたことが明らかとなりました」と記されている。

この研究は、幼少期の逆境体験が高齢者への加害に関連しているという負の影響がありうることを示唆している。高齢者虐待の社会・環境要因のリスク因子の研究である。それは子どもの生育環境にまで遡る。

暴力の連鎖があらゆる弱者に及ぶ可能性とは、個人的な要因だけでなく、社会・環境要因にも着目し、暴力予防のための研究を推進する重要性を示したと結論づけている(東京大学 先端科学技術研究センター減災まちづくり分野の古賀千絵特任助教チームの研究。2024年9月28日東京大学)。

2) 親からの暴力が非行に影響—中学生に調査—

「貧困・格差・虐待の連鎖を乗り越える教育アプローチの研究開発と普及」プロジェクトでは、基礎研究の一環として「国際自己申告非行調査(ISRD)第4次調査」の日本国内における調査を実施した報告がある(2025年10月)。

研究会の京都大学大学院の教授が、その結果を公表した(岡邊健教授)。近畿地方の公立中学校の生徒1,820名から回答を得た本調査から、「27.4%が親から叩かれるなど

の暴力を、14.2%が親から強く殴られるなどの深刻な暴力を経験している実態が明らかになりました。分析の結果、親からの暴力を受けた経験がある生徒はない生徒に比べて、過去1年間に非行に関わった経験が、統計的に有意に多いことがわかりました。また、経済的に余裕がない家庭のほうが親からの暴力が発生しやすく、さらに「家庭に経済的余裕がなく、かつ親からの暴力があった」環境で、最も非行が多くなる傾向が確認されました。」という内容である。

<https://smbckustudio.iac.kyoto-u.ac.jp/contents-2026041503/>

これらは貴重な調査研究である。暴力の連鎖とは表現していないが被虐待体験と非行の連鎖を指摘している。暴力の文化という本稿の関心と重なる。暴力は社会のなかに遍在しているという点である。

しかし、私の関心も同じだが、こうした研究は事態の一面である。さらに連鎖という言葉方からも分かるが、直線的な因果関係を想起させる点には注意が必要だろう。関連する要因は複数あるし、暴力を肯定もしくは容認する組織、制度、文化、意識が社会のなかに数多く存在しているので、被虐待の体験がさらに年齢を経て再現されていくことの要因の確定は難しい。

暴力を肯定もしくは容認する社会の構造があり（マクロ）、そこに個人の特性（ミクロ）が相関し、「あいだ」に媒体となる多様な要素が絡まり合いながら暴力行為が生成されてくる。これらの研究は暴力を振るう個人の問題に帰責させることなく脱暴力の社会的方策を編み出す必要性を根拠づけたものとして参考になっている。

3. 連鎖しない人がいることを組み込む必要がある

私はまだ本格的な調査には着手できていないが、連鎖もしくは再生産していない人と話すことがある。加害者臨床に関わる専門家に関係してくる暴力の行為者は捕捉しやすいが、そうではない人たちは、当然、加害者臨床とは無関係に生きているので、現場で出会うことはない。同じような趣旨のことを本連載で書いたことがある。「臨床社会学の方法(50)Z世代の可能性－男性性ジェンダー、脱暴力、アンラーンが交差するところ」（『対人援助学マガジン』第16巻第2号(通巻第62号)2025年9月）に書いた。当該箇所を引用しておく。「2. Z世代の息子との対話」のなかでこう書いた。

こうした話を授業や講演会でしていると、Z世代にある息子たちは敏感に反応する。20代前半のある男性からの質問である。「暴力や虐待を受けた子どもに対する支援プログラムはあるのか」と。幼少の頃、父親から暴力を受けた経験があるという。将来自分が家族をつくっていく時、子どもに対して同じように暴力や虐待をしてしまわないか怖く感じていると告白してくれた。幼児期・学童期をとおしてしつけと称して殴られたことがあったという。父親は優しい時がある一方で、暴力を振るってくる時もあった。そうすると普段から怒らせないように、ビクビクしていたことを覚えているという。「小学1年生か2年生のときのこと。朝学校に行く準備をしていて父親も仕事に行く直前だったとき、何か言い合いをしたんだと思いますが、父親がキレて私に暴力をふるったことがありました。その時どのように暴力を振るわれたか覚えていませんが（正確にはその瞬間の記憶だけがない感じです）、常に憎らしく感じ父親をにらみつけたのを覚えています。」と語る。「その瞬間の記憶がないということに関して

大学生になって心理学を学ぶ中で、もしかしたら解離しているのではないかと考えた」という。また、「もうひとつ強く記憶に残っていることは、私が父親から暴力を振るわれているときに母親が『顔だけはやめて!』と言っていたことです。」と語る。「大学生になってから母親にこのことを話すと母親は『覚えていない』と言っていました。父親に暴力を振るわれたことよりも母親が『顔だけはやめて!』と言ったことの方が衝撃的(「顔じゃなかったら俺は暴力振るわれていいん?」みたいな感じ)です。それを覚えていないことに強くショックを受けました。これまでに何度か家族の中でこうした行為について話す機会がありました。両親の考えは『しつけ』の要素が強く、『必要だった』という認識を持っているようでした。また、そのような子育てをしてきたが、実際子どもたちがしっかり育ったことを踏まえると、自分たちの子育ての方針は間違っていなかった、正解だったと感じているようでした。私自身も多少の暴力はしつけの一環で効果的に作用するだろうと肯定的に考えていました。」と家族生活を振り返っている。しかし、現在の家族関係は安定しているが、心理的暴力や関係コントロール型暴力についての話を聞くことで、「暴力を振るわれてつらかった経験を合理化するために無理やり肯定的にとらえているんじゃないか」と感じ、また、暴力や虐待を肯定的に捉えてしまう自分を恐ろしく感じました。」とも話す。「現在も父親は酒を飲みすぎることがあります。機嫌が悪くなると黙り込んでイライラしている様子を行動で示したりします。そういった行動に対して注意したい気持ちがありますができません。

おそらく、幼いころの経験、恐怖の影響だと思います。また、嫌だと感じる父親の行動を同じように自分が取ってしまうことがよくあり、本当に自分自身が嫌になることがあります。父親を反面教師にして絶対に同じようにならないと強く思うのに、同じような行動をしている現状が許せません。上記のような背景があり、私のように大きくなってからも過去の暴力や虐待の経験に苦しむ子どもがもっと早い段階から救われるための支援は

何かないのかと気になったため質問させていただいた」と話してくれた(本人の許可をもらい引用した)。

このエピソードを紹介したマガジンを読んだ他の院生がレスポンスしてくれた。

特に印象に残ったのは「暴力の連鎖」がどのような要因によって断ち切られるのかという内容である。また、同時に扱われたフレーミングの考え方についても興味を持った。暴力や否定的な環境の中で育ったとしても、その経験をどのように意味づけるかによって、その後の心理的影響や生き方が変わってくるという点が印象的であった。私自身、幼い頃から現在に至るまで、面前DVや言葉による暴力を経験してきた。現在はある程度慣れてしまい、意識的に気にしないようにしている部分もあるが、幼少期には自分の力ではどうすることもできず、強い無力感を感じていた。しかし、小学校受験を経験し、自宅から離れた学校に通うことになった。また、塾にも通っていたため、家庭以外の場所で過ごす時間が長かった。その結果、学校や塾など家庭外の環境から肯定的な価値観や人間関係を得ることができ、それらに支えられながら成長してきた感覚がある。もし家庭中心の環境で生活していた場合、異なる価値観や人間関係に触れる機会が少なく、現在とは違った形で負の連鎖につながっていた可能性もあるのではないかと感じた。そのため、暴力の連鎖を断ち切る上では、本人の性格や努力だけでなく、家庭外に安心できる居場所や肯定的な他者との関係が存在することが非常に重要なのだと考えた。また、フレーミングの視点から考えると、同じ経験であっても、それをどのように捉え直すかによって意味が変化することを学んだ。つらい経験そのものが消えるわけではないが、それをどのように理解し、今後の人生にどう位置づけていくのかを考えることが、自分自身を支える力にもつながるのではないかと思った。

また別の院生の反応である。

私自身、小学校の頃も放課後の活動や家に帰らなくていいように居残り申請をしていたり、中学では部活で強化部に所属し、21時まで練習していたり、高校や大学も自習室を活用するなど22時ごろまで残っていたりと、他の誰よりも人生で圧倒的に長い時間「学校」という場に滞在していました。私にとって「学校」という場が逃げ場であり、居場所だったのだと思います。

さらに、学部ゼミではクラブ活動と体罰について研究する学生が毎年存在している。それほどにスポーツクラブでの体罰はたくさんあるのだろう。「体罰を肯定する意識-自傷と自罰」が卒論のテーマである。こんなインタビュー調査をしていると報告が演習であった。

高校の同期には、中学時に所属していたサッカークラブで、顔面を拳で殴られる、脇腹を蹴られるといった暴力を受けていたようだ。それに加え、傘、クーラーボックス、三角コーンといったものを使用した暴力もあった。また、手の平がえぐれるまで手押し車をさせられる、土下座させられて、後頭部を足で押しえつけられるといったこともあった。背景として、練習で手を抜く、監督が求めるクオリティのレベルに達していない場合、理不尽に殴られるなど、監督自身の機嫌によるものがほとんどだ。当時の感情は、ただただ監督が怖く、サッカーを楽しむことより怒られないようにするためにサッカーをしていた。振り返ってみれば、あれほど怒ることは愛だと思いが、暴力はやりすぎであると思っていたようだ。

大学の同期も中学時代のサッカークラブで、似たような形で体罰を受けていた。拳で殴られえ、平手打ちされる、蹴られるといった暴力を受けていた。背景として、試合でのプレーに監督が納得いかない場合という監督の機嫌によるもの、ご飯の時決まった量を時間内に食べられなかった場合と非常に理不尽である。当時の感情は、

最初はなぜ殴られなければいけないのかわからず、途中からは自分が悪いと思いきみ始めていた。

彼の研究は、さらに自らはどうして体罰を肯定するような意識をもたずにいるのかという自分研究（当事者研究）も含まれている。脱暴力を意識するようになった経過、つまりこうした関心を持って社会病理学演習を選択した自分を振り返ってはどうかと提案した。

4. 脱暴力の選択には努力がいる - DV の定義に関わって

ここに紹介した学生・院生は21歳から24歳だ。Z世代は脱暴力を意識として形成しているといえる。脱暴力にむかうには努力が要するということでもある。被虐待体験がある人のその後の生き方の全体図を把握するためにも脱暴力へと分岐した人の調査は大切である。その選択は偶然ではなく意識的な努力の結果もしくは効果といえる。そこにはジェンダー作用もある。とりわけ男性性が作用することを注視すべきだと考える。社会が共有している男らしさ規範との格闘が想定されるからである。暴力を受けた者は脱暴力の方への歩み出しを意識的に選択することになる。

暴力に対峙する際の怒りの感情を処理しつつ、暴力を誘発するような圧がかかるからだ。暴力を乗り越える時には「強さ」が要る。脱暴力への「正義」が内なる暴力性を喚起する。そうした意識が再生産や連鎖をつくりだす契機となる。ここに問題となる男性性、主流となっている男らしさ意識が生成する。さらにやっかいなのはそれを内面

化させる男らしき規範である。それは内なる葛藤となる。連鎖や再生産していないことはこうした過程を批判的に見ることができていることを意味する。被虐待体験をとおして暴力について LEARN したが、それを UNLEARN へと展開させることができていると想定できる。

またこのようにも言えるだろう。暴力の文化のなかを UNLEARN できたと。暴力の文化のなかを脱暴力へと歩み出しできたと。だからそれを言語化することは大切だ。そうした男性の経験から周囲は学ぶことができる。脱暴力の生き方を選択したことを社会が LEARN する根拠にしていくことができる。

これは暴力の定義にも関係してくる。DV、虐待、部活での体罰、ハラスメントなど何らかの関係性のなかで生起する暴力は、身体的暴力に限定されない。通例、心理的暴力と名付けられているが、この理解はまだ精緻化すべき点が多い。たとえば、以前から指摘してきたが、「面前DV」という言い方は再考すべきである。場合によっては事態を歪めていくことさえある表現だと考える。

「児童虐待の防止等に関する法律」の第二条は「心理的虐待」を「言葉による脅し、無視、きょうだい間での差別的扱い、こどもの目の前で家族に対して暴力をふるう(ドメスティックバイオレンス:DV)、きょうだいに虐待行為を行うなど」と定義している。問題は「目の前で」という箇所である。もちろんそれは脅威となるので直接子どもに向かっていないとはいえきちんと捕捉しておくべきだが、家族のなかで暴力があることは関係性全体に影響を与えるので広義に把握すべきだ。関係コントロール型

暴力として私は定義してきた。

関係コントロール型暴力とは、殴る・蹴るといった身体的暴力だけでなく、言葉や態度、心理的圧迫を用いて相手を自分の支配下に置き、思い通りに統制(コントロール)しようとする暴力形態のこと。従来の「怪我をさせる暴力」の定義を超え、DV(ドメスティック・バイオレンス)、虐待、ハラスメントの根底にある「支配・非支配の力関係」そのものを問題視する臨床社会学的な概念として使っている。主な特徴3点をこの概念の提唱者であるエヴァン・スターク(Evan Stark)が定義している。彼は「強圧的コントロール(Coercive Control)」という。

主に以下の3点である。①「威嚇・脅迫」: 大声で怒鳴る、不機嫌をアピールする、別れると脅すなど、恐怖心を与えて逆らえないようにする。②「孤立化」: 友人や家族との連絡を制限する、スマホの履歴をチェックするなど、外部の相談相手や逃げ道を断つ。③「コントロール」: 服装、スケジュール、金銭、時間の使い方を細かく指図・命令し、相手の自律性を奪うことである。このコントロール行動は見えにくい。「愛」や「指導」という名のもとにある。「あなたのためを思って言っている」「心配だから」という名目で行われるため、被害者自身も「自分が悪い」と思い込まされやすい。身体的な証拠が残らない。精神的DVやモラルハラスメント、マインドコントロールが主体であるため、警察や周囲が介入しにくい。

この暴力は加害者の「他罰性(相手が悪いと責める意識)」が強く、刑罰を与えるだけでは根本解決しない。「関係性の病理」という。そのため、諸外国では司法と臨床(カウ

ンセリング)を組み合わせた治療的司法や、加害者の認知を修正する脱暴力プログラムの受講命令制度などが政策化されている。

*この箇所は「親密な関係に潜む暴力。加害者の心理を解き明かす一家族に暴力をふるう男性の『脱暴力』を支援する」(「立命館大学研究活動報 RADIANT」)に書いた内容です。宣伝ですが、この研究活動報の記事が、学内外からのアクセストップ3となり総長表彰をいただきました。その記事は末尾に掲載しています。加害者問題が関心を持たれています。

<https://www.ritsumeai.ac.jp/research/radiant/article/?id=151>

<https://www.ritsumeai.ac.jp/research/radiant/plus/plus/?id=15>

被虐待体験や体罰による指導はこうした心理的作用を伴う、あるいはこの側面が暴力を継続させる。そして、自らを責めてしまう心理も生じやすい。他罰性が効果をもって相手のなかに入り込み、自罰性へと反転する。これが持続的にある環境は暴力の文化そのものである。そのなかを生き抜くという意味では、脱暴力への歩み出しは意識的なものとなる。関係コントロール型の心理的暴力がある環境を、つまり暴力の文化のなかから脱暴力への選択をするということはいかにして可能であったのかを調べたいと思う。暴力の連鎖という概念だけでは全体が見えないからである。

5. 脱連鎖は希望の脱暴力論であること

心理的暴力という場合、個々人への影響だけではなく、関係性を破壊するという視点からも把握すべきである。男親の暴力で子どもが保護されるという事態は母子の関

係性を破壊する。子どもが不在となるのだからそもそも関係性が構築できない。乳幼児であればなおさら愛着関係の形成にヒビが入る。きょうだいがいればその関係性の発達も不可能になる。

関係性への暴力となるので、家族関係全体に影響を与える。母子関係やきょうだい関係の発達を阻害する。男親塾では、父親の虐待で介入と保護がある場合、家族へのこうした影響を自覚することを促している。母親やきょうだいは何の落ち度もない。母子の相互作用ができない。きょうだいの関係性発達ができない。そして児童相談所との面談では母親は男親と同席しながら面接を受けることになる。この場面での母親の心情はいかばかりかと想像することも再統合支援には不可欠となる。関係コントロール型暴力はこうした関係性に影響を与えることを指摘するので、面前で暴力を目撃するということだけにはとどまらない。

また、子ども虐待では、スポーツ虐待、芸術虐待、教育虐待などがある。スポーツでは野球やサッカーの事例と多くであらう。基礎体力づくりという意味で筋トレ虐待もある。過剰な指導となる。本来、楽しみとしてのスポーツだがそうではなくなるから子どもも付き合いきれなくなる。10歳頃までに鍛えられていくと確かにその分野での能力や技術は高まる。学校の体育では秀でた力も発揮する。つまりできてしまう自分がある。この逆説的な事態をいかに乗り越えるか。自問自答する。「もういやだからお父さんの指導を受けたくない。お願いだからやめさせてください。」と10歳の子どもの懇願されたと話をしてくれた男親がいる。

その男性は父親として個別に指導をする

ことはやめ、地域の子どもスポーツクラブにすべてを委ねた。しかししばらくの間、子どもはその練習をすることすら虐待を思い出すのでできなかったという。本来の楽しみとしてのスポーツをすることができたのはしばらくしてからだったとグループワークで話してくれた。そういう言葉を発するまでの子どもの心中を察することができていただろうかと問う。子どもはいつもそう思って指導に耐えていたことにきちんと謝罪できただろうかと問いかける。その総体に対しては謝りきれていないという返事だった。

子どもは、暴力のある父子関係を乗り越えるためにかなり意識的な努力をしていることになる。はっきりとNO!と言えたので、脱暴力への歩み出しができた。この体験は、長じて、連鎖しないことの契機となったこととして記憶されていくはずだ。この脱暴力への努力は自らを倫理的にも強くしたことになる。そうした会話が父子できるとよいのだろう。

先に紹介したスポーツクラブにおける体罰の研究をしている学生の視点は「自虐と自責」である。この生徒たちは連鎖するフレームに閉じ込められることはない。リ・フレーミングできたことになる。この生徒や学生は基礎ができているので単に技術的に向上することではなく楽しみとして自分のペースでスポーツを楽しむことができるようになった。男親の理不尽な指導を拒否できた力は多面的に影響していこう。母親にも相談したかもしれない。その母親の勧めもあって、男親は UNLEARN の男性問題相談に繋がった。相談に来ただけまだ希望はある。そしてその子どもは暴力を拒否

できたので脱暴力は希望として浮かびあがった。

さらに言えば、希望としての脱暴力を偶然としないためには、社会実装が課題となる。たとえば学校教育における脱暴力、非暴力、反暴力の教育は極めて重要となる。関係者が被害あるいは加害だと気づくことの手掛かりになるからだ。DV、虐待、体罰、ハラスメントなど、関係性のなかの暴力について適切な知識の提供がまずは必要である。

私たちは善き隣人、知人や友人や同僚としての存在も大きく身近な相談者役割を引き受ける。SNS の役割も若い世代では無視できない。街角のポスター、YouTube で描くこと、インフルエンサーが脱暴力を唱えること、脱暴力を描いた漫画、映画やドラマなど、あらゆる場面のなかに脱暴力への選択肢を実装していくことになる。今後は生成 AI も脱暴力を指摘するだろう。あらゆる「もの、こと、ひと」が脱暴力に関与する必要がある。

ちなみに生成 AI はまだ UNLEARN の取り組みを知らない。情報発信の量を増やさなければと思う。

